

「秦の始皇帝陵の 銅馬車に思う」

一般社団法人日本銅センター 副会長
古河電気工業(株) 代表取締役会長



吉田 政雄

私は子供の頃から古代史が好きでした。日本の古墳時代の邪馬台国論争や南米のインカ文明、中米のマヤ文明の遺跡にも関心を持っています。中国のシルクロードの攻防史や三国志も好きですが、実際に目のあたりにして驚愕したのは、秦の始皇帝の兵馬俑博物館の光景です。

当社は一九八六年に中国の陝西省西安市に中国の企業と光ファイバーケーブルの合弁会社(現社名・西安西古光通信有限公司)を設立しました。衆知の如く、西安はかつての長安で、シルクロードの起点として栄えた歴史の街です。経理部長とCFOを務めた時に、連結決算対象会社である同社を三回訪問しました。二度目の出張の時に兵馬俑博物館の一号俑坑、約十年前の三度目の出張時に二号俑坑を訪ねました。

始皇帝陵は、生存中の都での統治の様を再現した地下王国と云われており、兵馬俑坑は始皇帝を守るべく配された屈強な秦の軍陣を模した殉葬坑と考えられています。兵馬俑坑は約八千体の陶俑陶馬とともに、青銅器の世界でもありました。青銅兵器が四万点も出土したこともにも驚かされましたが、出土した青銅剣に錆あがりが全然大きく魅かれました。製造時と変わらない光沢を有していること、クロム酸塩処理が施されていたとのこと。従来は、この技術は二〇世紀の一九三〇年代に確立されたと見られていま

したが、何と約二千年以上も前に発明されていたものと判明しました。更に目が釘付けになったのは、二号俑坑から発見され修復後にガラスケースに陳列された二台の銅馬車でした。各馬車は共に三千点余りの部品を組み合わせた精巧な芸術品でした。特に印象的であったのは、二号銅馬車の御者を雨や陽射しから守っている傘蓋でした。案内人の言によると、傘の骨の集合部は現在の伸銅の冶金技術でも再現が難しいとのことでした。

私は文科系出身なので、技術難度の真偽は良く判りませんが、もし現時点でもこの技術が未解明のままであるならば、将来の大きな楽しみになるかと考えています。日中両国の伸銅業界が協力してこの技術の解明に取組めれば、これぞまさしく「カパーロマン」といえるのではないのでしょうか。



兵馬俑の「銅馬車」

銅

目次

2	カパーロマン 「秦の始皇帝陵の銅馬車に思う」 吉田 政雄
3	銅の歴史物語 分業専門特化した匠の技を、 キヤクター銅像などに活かす 高岡銅器
4	ユーザー訪問 新幹線に快適な通信環境をもたらす 銅管を使用した「漏洩同軸ケーブル」
6	リレー随想 善光寺如来と金銅仏 若麻積 敏隆
8	ルポルタージュ 信頼性と施工性を高める新たな挑戦 建築用銅管の明日をつなぐ
10	カパーワールド 意外なところにユニークな活用と技！ こだわりの答えは、銅にあり！
12	随筆再掲載 オリンピック寸感 梶山 季之
14	咲き誇る「銅のアート」 銅センターニュース トピックス